

A62

1596年慶長近畿大地震で中央構造線が活動した可能性と
1605年南海トラフ津波地震への影響

石橋克彦 (建設省建築研究所国際地震工学部)

●中央構造線活断層系 (MTL系と略) は紀伊半島西部～四国東・中部でA級の活動度をもち (活断層研究会, 1980), 最後の地震発生がいつだったかは大きな問題である。現在の定説では, 歴史時代の活動はないとされている。これに対して本講演では, 1596年9月5日 (慶長元年閏7月13日) の近畿地方の大地震がMTL系の活動によるものだった可能性を指摘し, それと1605年2月3日 (慶長9年12月16日) の南海トラフの特異な巨大津波地震 (石橋, 1983) との因果関係を考える。

●慶長近畿大地震は, 京都・伏見・奈良・大阪・堺などで大被害を生じ, 和歌山市の総持寺も全壊した。确实さは劣るが, 高松周辺でも烈震以上だったらしい。地震を起こした活断層について, 藤田・大長 (1982) は京都から奈良に至る南北系の断層か北東-南西系の淀川断層帯のどちらか, 佃・他 (1988) は有馬・高槻構造線-六甲断層系としている。しかし, 注目すべきは, この地震で鳴門市高島 (図のn) 付近が隆起した (新収日本地震史料) ことで, これは上記いずれの説でも説明できない。宇佐美 (1987) はこの隆起は1605年のことかもしれないとしたが, 南海トラフ沿いの地震では鳴門付近はむしろ沈降するセンスである。また, 1605年の地震の唯一の震害記録とされている淡路島千光寺 (図のs) の倒壊は, 1605年の地震が京都でほとんど無感だったことと史料の性格から (石橋, 1983), 1596年のことである可能性が強い。

●以上のことから, 慶長近畿大地震の際に, MTL系の少なくとも鳴門断層 (北側隆起) (図の1) が活動し

たという作業仮説を提出する。京阪周辺の活断層も動いたらしいが, それはどちらかといえば二次的なことではないだろうか。MTL系の根来断層・五条谷断層 (図の2・3) やその北方の南北性断層も活動したのか, あるいは先山断層 (図の4) などが活動して六甲方面の断層運動につながったのかは, いまはわからない。MTL系の活動が西へどの程度延びていたかも不明だが, まず鳴門断層のトレンチ調査が望まれる。

●1586年に中部日本の天正大地震 (M8級) があって1596年と1605年の大地震が続くが, これら一連の活動は以下のように解釈される。<天正大地震の結果近畿ブロック北半が東方に変位し, 臨界状態にあったMTL系沿いの●応力が限界に達して1596年の大規模なすべり (右横ずれ) が生じた。このとき, MTL系の北側の近畿ブロックの活断層密集地帯でも複数の活断層が動いて歪を解放した (余震が非常に多かったことと調和する; Mは8級だろう)。このMTL系のすべりによって南側の南海トラフ沿いの応力が緩和され, 1605年のフィリピン海プレート上面のすべりが, くい違い速度の遅い津波地震となった>。1596年9月1日 (4日という定説はたぶん誤り) の別府湾の地震も近畿大地震と関連があると思われる。

